ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「夏風邪？　来夢音が？」

「ええ。それで、成瀬君もお休みするって。ああ、そうそう。青柳君と、星川君、出雲君、あと三年四組の相川君、それに……こっちは二人のお兄さんかな？　田島良助君に、『今回はご迷惑をおかけして、申し訳ありません』って伝えて欲しいって成瀬君が」

　朝学活の時間に発せられた素っ頓狂な雅也の声に、担任の先生はそう言って頷く。

　一瞬、何の事か分からなかった雅也。少し離れた席に座っている神楽や、太一も、怪訝そうな顔をしていた。

　そんな三人だったが、白が謝った理由にすぐに思い当たる。そう言えば、三日後には合宿が入っていた。今回は神楽と太一も参加するので、さぞ賑やかで楽しい合宿になるだろうと今からワクワクしていたのだが……来夢音が夏風邪をひいてしまっては、合宿どころでは無いだろう。

　次いで先生の口から出てきた言葉で、三人ともそれを確信する。

「えっと、なんか成瀬君が、君達のお父さんにはもう話を通してあるのでって。『日程をずらしたので、詳しいことは後で僕から電話します』って言ってたよ？」

　どうやら、合宿自体は中止にはならないようだ。

　それにしても、わざわざ電話してくるなら学校に来ればいいのに。と三人は一瞬思ったが、すぐに納得する。白は執事だ。主である来夢音が風邪をひいたというのに、放っておくことは出来なかったのだろう。

　しかしあれだ。クラスの中心人物である来夢音が休みとなると、クラスの雰囲気も随分と重いものになると、雅也は思う。

　特に……

　ちらりと後ろの席の方に目をやると、心配していた人物は、かなりショックを受けたような表情で固まっていた。来夢音と白以外に親しくしている人物がいない――一応雅也や神楽も仲良くしようと努力しているつもりなのだが、正直手応えは全く無い――ので、その衝撃は想像に難くない。

　その人物以外のクラスメイト……そして担任の先生でさえ、心の中で溜息を吐いた。

　いつもつっけんどんな態度が、今日は一段と激しさを増すんだろうな、と。

　そして放課後になり、クラスメイトが次々と校門から駅の方に向かう中。

　雅也、太一、神楽の三人は、拓馬を待っていた。三年生の彼は、二年生と比べると少し授業の数が多く、帰ってくるのもちょっと遅い。そのため、いつもは先に帰っている三人――ここに来夢音と白も含めると五人なのだが――なのだが、今日は拓馬を待っていた。

　別に、三人に何かはっきりとした理由があるわけでは無い。ただ、いつもいる二人がいないので、物寂しく感じてしまったのだろう。

「おせーな……」

　とは言え、やはりと言うべきか。太一は待つのに飽きてしまったようだ。先程から、校門の前を行ったり来たりしている。一、二年生はあらかた帰ってしまったので、校門から出てくる人は少ない。

　こんな時、ポケモンバトルでもしていればいいのだろうが、流石に時間がかかりすぎる上、校門前でのポケモンバトルは校則で禁止されている。

　ちなみに雅也達がごく普通の、ポケモンバトルなんか学校の授業でしかやらないような生徒だったなら、フシギソウに蔓を回してもらって、他のポケモン含めて皆で一緒に縄跳びでもするのだろうが……この三人に、そんな考えは欠片も無かった。彼等にとって、『遊ぶ＝ポケモンバトル』なのである。

「そろそろ来るんじゃない？」

　掛けられた時計を見ながら、雅也が言う。拓馬は校則を破って、途中で買い食いをするような生徒では無い。帰ってくる時間と、道場から学校まで来る時間を逆算すると、そろそろ出てくる時間であった。

　そんな雅也の予想通り、そう言ったすぐ後から、何だか騒がしい声が聞こえてくる。声の聞こえる方に目を向けると、ガラス越しに三年生が玄関までやってくるのが見えた。その中に、友達と親しく話しながらゆっくりと歩く拓馬の姿も見える。噂をすれば影だ。

「拓馬！」

　下駄箱まで来た辺りで雅也がそう叫ぶと、拓馬はここで待っている三人に気がついたのだろう。先程までお喋りをしていた友達に手を振って、こちらまで早足でやって来た。

　てっきりいつものように先に帰っていると思っていたのだろう。彼の顔は、いつものように爽やかな笑顔の他に、ビックリしたような色も三人には見て取れた。

「どうしたの？　珍しいね」

「いやよ、今日は白と来夢音が休んじまってな」

「ああ、なるほど。三人で帰る気にもなれないから、僕のことを待っていたんだ」

　太一の言葉で、拓馬はある程度のことを理解したらしい。

　だが、そんな拓馬の言葉に、自然と帰路につきながらも神楽は怪訝そうな顔をする。

「拓馬……もしかして、二人が休んだ事を聞いていないのか？」

「え？　ああ、そうだね。今初めて聞いたよ」

「……ということは、合宿のことは聞いてないよな？」

　神楽の質問に『？』マークを浮かべる拓馬に、神楽は今日の朝、先生から聞いた事を拓馬に話す。

　しかし、合宿の日程が変更になることを伝えると、拓馬は微妙そうな顔をした。

「どうかしたの？」

「えっと……ちょっと今年の夏は予定をつめちゃってね」

　雅也が不思議そうな顔で聞くと、拓馬は躊躇いがちにそう言った。

　だが、彼のその言葉で、雅也は理解する。そう言えば、拓馬はこの学校の校長先生や理事長と交流があり、その付き合いで、偶に博物館や学会等を見学したり、大学の研究を覗きにいったりするのだ。『予定をつめた』と言ったところをみると、今年はさぞ色んなところに遊びに行くのだろう。

「ま、そこら辺はこっちで調整するよ。合宿の方が大切だしね」

　そうは言ったものの、拓馬は心中でたらりと汗をかく。合宿の日にちが延びただけなのだが、流石にそれで空いた日に元々の予定を入れるわけにはいかない。学会の日時や校長先生方の予定もあるし、何より拓馬や他の皆にも準備というものがあるのだ。最悪、どれかの予定はキャンセルしなければならないだろう。

　拓馬は誰にも聞こえない程度の大きさで、溜息を吐いた。

　取り留めも無い話をしながら、途中で太一と神楽と別れ、二人は田島道場に着いた。

　ポケモンバトルの戦術において熱く議論しながら門をくぐり、玄関まで辿り着くと、二人はそこで一瞬、ピタリと止まる。

　見慣れない靴が一足、揃えられていることに気がついたのだ。高級そうな見た目と、その大きさからして、恐らくは大人だろう。黒い革靴はよく手入れをされており、持ち主がどのような人物なのかを伺わせる。

　雅也と拓馬は顔を見合わせると、恐る恐る中に入った。あんな靴をはいてくる来客に心当たりがあるとすれば、嶺川一氏や成瀬優氏だろうが、さっきの靴は彼等のものでは無い。田島道場に来客など滅多に無いせいか、一体何があったのだろうという、正直あまり良くない想像が二人の頭を駆け巡っていた。

　だが、それはどうやら杞憂のようだ。中に入った二人の耳に、居間から楽しそうな談笑が聞こえてきたからである。

聞こえてくる声は三人。

そのうち二人は田島辰巳と良助のものだった。だが、残る一つの声には、雅也も拓馬も覚えが無い。

「……？」

　二人はあまり音を立てないようにそっと、されど足早に居間の方まで向かう。

　雅也と拓馬はアイコンタクトを交わすと、障子戸の隙間からこっそり中を伺った。が――

「一体、二人して何をしているんだ？」

「――っ！」

　突然戸が開いて、田島辰巳が怪訝そうな顔を覗かせてきて、二人は飛び上がらんばかりに驚いた。

　それでも中を見ると、そこには呆れたような顔をする良助と、キョトンとした顔でこちらを見る青年の姿が。

　この出会いが、まさかあんなことになるとは、この時誰も予想が出来なかったのである。